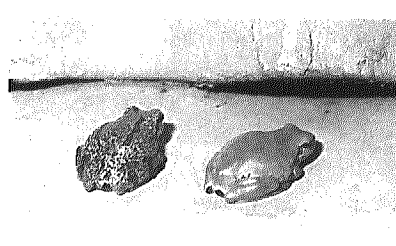


町内のカエルの種類が減りつつあるという 話から、町史自然編の宣伝をさせていただきます。

ふつとカエルと呼ばれるが、それは別種である。最近、町内で見かけることになった。



黒埼町内で見られるカエルの種類が減っている、といわれて皆さんはどう思われるでしょうか。『黒埼町史 資料編5自然』で記録するため調査したところ、一部の種類を除き、以前よく見られた種類も現在ではほとんど見られなくなっていることがわかってきたのです。それなのに、カエルの種類が減っているの、とげげんに思われることでしょうか。確かに、ウシガエルやアマガエル(正式にはニホンアマガエルといいますが)は、現在でも町内でよく見たり聞いたりすることが出来ます。しかし、以前はよく見られたトウキョウダルマガエル(実はトウキョウダルマガエルというカエルなのですが)が、現在、黒埼町内ではほとんど見ることができなくなっています。また、アズマヒキガエル(一般にガマと呼ばれる)やニホンアカガエルなども、以前に比べ激減しており、絶滅しつつあると考えられます。



まだまだたくさん見られるニホンアマガエル

トウキョウダルマガエルとい



町内でみられなくなったジャコウアゲハ

ルの減少については、「水田における水の管理が徹底され、ある時期、完全な乾田化が生じ、幼生・成体の生息地にふさわしくなくなる」と「一因」(『黒埼町史 資料編5自然』226ページ)とされています。ほかのカエルたちも、環境の変化によって減少していると考えられます。

変わりつつある動植物の姿
カエル以外にも、ジャコウアゲハというチョウなどが黒埼町内で見られなくなりつつあります。

逆に、こうした環境の変化などで増えているものもあります。外国からやってきたコバンソウやシロツメクサ、ヒメムカシヨモギなどの「帰化植物」がそうです。新幹線高架下に巣をつくっているイワツバメやチョウゲンボウなどの鳥も、これまで黒埼町内で見られないものでした。このたび刊行された『黒埼町史 資料編5自然』では、このように大きく変わってきている黒埼町内の生物の世界(現在、黒埼町内ではどんな動植物が見られるか、またどんなものが見られなくなった

町史は現在、2巻出ています

『黒埼町史 資料編5自然』は、町内のカエルはもちろんのこと、植物・鳥・昆虫・水生動物などの、現在までわかっている姿が記録されています。また、気象・地形・地質などの町をめぐる自然環境についても、まとめられています。B5判、全ページオールカラーで386ページ。頒布価格は1冊1万円(税込み)です。また、『黒埼町史 資料編3近代』も既に刊行されています。こちらはB5判897ページで頒布価格は1冊5千円(税込み)。どちらも、役場2階の町史編さん室で取り扱っています。お問い合わせは、☎377-3101内線232か233までどうぞ。

なお、後世に残す資料とするため、アマガエルやウシガエル以外のカエルを最近見たことがある、というかたは、町史編さん室まで情報をお寄せください。皆さんの協力をお願いします。

体裁はB5判、386ページで全ページオールカラー。ぜひご家庭に1冊お備えください。入手方法については左欄をご覧ください。

黒埼町の今音

執筆 宮田栄門

黒埼町調査伝を提灯行列で
大正九年八月二十日記事

国勢調査に対し西蒲原郡黒埼各調査委員は、過半来より極力是が徹底に努め居られるが、同村役場にもこの際村民に徹底せしむべく吏員を出張せしめ各字に講演及問答をなし、又一方遠からず世人の注目を引くべく、小学校生徒五年以上をして「国勢調査十月一日」等を染抜きたる提灯を与え「国勢調査伝歌」を歌わしめ夜間部路を巡回すべき由なるが、尚不徹底調査洩れ落ちのなきを期すべく日頃来より二十五名の調査委員全部各受持区内の各部に付下調査に着手しつつあり。

我が国の第一回国勢調査の実施が大正九年十月一日と決まり、黒埼村役場や国勢調査委員の取り組みの様。

何しろ我が国始まっての大事業。これを村民に徹底させるため講演会を開いて問答したり、「国勢調査伝歌」をつくり、小学生徒に「国勢調査十月一日」と書いた提灯を持た

新聞からたどる黒埼の歴史 (三)

大正から昭和初期にかけて大野諏訪社には一町歩ほどの池があり競泳大会などが行われていた。

せて各部落を提灯行列させる等、調査洩れのないよう努力しているという事である。※ちなみに、この当時と現在の人口、世帯数を比較すると、
・当時 一万五千五百五十四人
・千八百六十九世帯(大正七年三月五日の新聞)
・現在 一万三千三百三十八人、六千二百五十二世帯(平成二年国勢調査)である。

大野諏訪池に競泳大会
大正十五年八月十四日記事
西蒲原郡大野青年会の主催に於ける近郷陸上競技大会は、水害地その他事情により一



大野諏訪池で行われた競泳大会。現在の諏訪社から池があったところは想像がたい

時役員の間停とんの状態なりしが、協議会を重ねること数回、十二日確定し、いよいよ来る十七日、水泳競技大会に変更開催することとなり、場所は風光明媚緑したたる大野の水郷諏訪池を選定し、係員はそれぞれ賞品の募集、競泳場の調査、プログラムの作製に奔走を開始せるが、当日参加資格は個人を以てし青年、軍人、学生、小学生の四種とし種目は五十メートル、二百、四百、千メートル、千メートル、突にて地味は盆休みのことなれば盛況を呈す

べく期待されている。昔、諏訪社の前にあった通称「諏訪池」で大野町青年会主催の近郷水泳競技大会が行われることになった。六十七年前のことである。今は幻となったが当時の諏訪池は、広さ一町歩余(一ヘクタール余)もあり、神域の森に包まれた水は清明で、「風光明媚緑したたる水郷諏訪池」と記されている。この、諏訪池で行われることになった水泳大会。競技場となる池の深さや距離の調査、水泳種目プログラムの作製、町の商工業者へ出場者への賞品の寄付廻り等、それぞれに奔走する青年会員たちの姿が目に見えようである。大野の江差会の諏訪池つり堀計画
昭和二年十一月十四日記事

十日の両日大野館に於いて江差節大会を開きその純益金八十円を得た。今後しばしばこの会を催しその得た金によって終局の目的を達する決心である、右に付同会の幹部高橋秀月、八田南月の両氏はこもこも語る。「私たちの今回の計画は甚だ前途遠遠の感があるが大野町の将来を思うと断行する覚悟です。大野町は料理屋と業者の多い遊廓地です。ですから是非自給自足の域に達せしめる必要があるのです。江差会では微力ながらこの努力を続けていくつもりです。先ず第一に神社の橋から改築したいと思っています」言々。町に昔あった民謡の江差会が、昭和二年十一月九日、十日と二日間、仲町の野館で江差節大会を開き八十円の純益金を得た。会では今後も江差節大会を開いてその収益金によって町の発展につくしたいというもので、先ず大野町の自給自足の収入を得る道として諏訪池に射を入れ、太公望を集めて釣り堀りの収入を町の基本基金にしたい。又当時神社の玉橋がいたんでいとものか、橋の改修もしたいということである。しかし、諏訪池釣り堀の計画は実現しなかった。

西蒲原郡大野町諏訪社境内の諏訪池約一町歩は、諏訪の杜の倒影相映する暁景夕日に拘すべきものあり、先年池畔に堤塘を築いて桜樹を植えるなら対岸鷺ノ木の桜林とともに、泉下まれば見る景勝地と化すべく期待され、これが実現に意をそそぐ者もあつたが、近來篤志家の間に諏訪神社境内の木橋腐朽改築をコンクリート造りに改めこれが寄付金募集の附帯事業計画の一部に入れんとする計画再現の兆しありといえ、早晩これが実現を見るべく、その暁は泉下第一の景勝地として讃えられるものと見られている。昭和二年に於いて、翌三年、また新聞に諏訪池のことが載った。「大野の諏訪池は隠れた景勝地」というのである。諏訪の杜の倒影相映する暁景夕色真に拘すべきものありとあるが、その通りで今日の神社の景観とはまるで違つ、神々しく荘厳な趣のある社であり、杜であった。境内から更に神域に入るに諏訪池にかかった玉橋を渡ったが、「カラコロ」という下駄の音が、今も思ひ出の中に聞こえてくるようである。(来月号に続く)